随想

旅券がのこすところ

愛知淑徳大学コミュニケーション学部教授
山内啓介

旅券がのこすところ1年である。1998年12月からの10年ものだ。そろそろ更新をしなければならないが、あと何回作成して使うだろうと、赤い表紙をみつめている。

出入国記録を繰ってみた。査証を必要とした渡航が8回ある。ほとんどが中国への業務であった。その査証を必要とした時期長期というほうが適切だ。思い起こせば、1984年に在北京、日語教育専門家として中国訪問したのが始まりだった。それから数えると30回近くの往復がある。いまより古い5年ものの旅券で日本語教育に関係したものでは、日語教学研究会の招請で集中講義、大学間国際交流協定の締結、協定による訪問と講義、そして中国政府奨学金を受けた留学がある。年に1回か2回の旅行だったと、思い出して感慨深い。

そして、2000年以降の記録が本学とのかかわりだ。年次ごと、1回ずつ回数が増えて、2005年には5回、プロジェクトの研究で訪ねているのは、日本語教育カリキュラムの実験のためであった。2006年には2回、あらためて2007年には3回の往復があることに気づく。日本語教育海外研修が行われているので、毎年9月に南京を訪れるが、それを含めて調査研究と講演のために出かけている。この年末に研究協力をするので、また行かなければならない。随想が印刷されるころには、出張中だろう。

日本語教育に関わると、その業務は予定通りの旅のために、あわただしく過ぎる。短期に駆け足旅行をして帰るだけであるので、中国語もなかなか修得できない。大学の交流に貢献できれば、コミュニケーションの極みでもあろうかと、本学の交流協定校へと出かける。彼の地では日本人と思われなくなってきたようであるから、ますますこの旅券はアイデンティティーのために重要であると、思いをかみしめている。